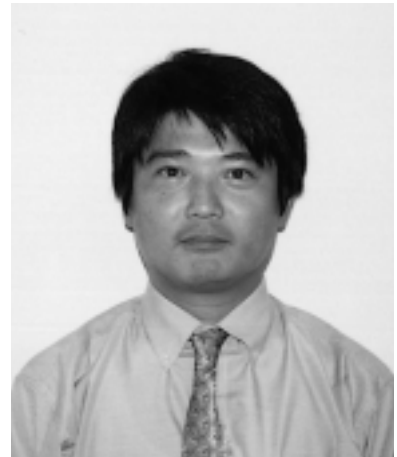


エコファームにおける 資源循環型農業の 取り組みについて

生活協同組合コープこうべ福祉・環境活動部
環境チーム課長 宮 地 毅

E-mail: miyaji-t@kobe.coop.or.jp
http://www.kobe.coop.or.jp/



はじめに

はじめまして。生活協同組合コープこうべの宮地と申します。今回は、兵庫県および神戸製鋼所との連携で行っているモンゴルへの植林事業がきっかけで、パンテックユニオンの方々と知り合うことになり、その縁でこうしてみなさんの前で話をさせていただくことになりました。

本日は、コープこうべが行っている環境問題への取り組みとともに、エコファームにおける資源循環型農業の取り組みについてご紹介したいと思います。

コープこうべの地球環境への取り組み

コープこうべでは、組合員活動および事業活動の両方の分野でさまざまな形で環境問題に取り組んでいます。詳しい内容については、コープこうべエコレポート（環境報告書）の中に記載していますので、後ほど目を通していただければよく理解して頂けると思います。

これらの取り組みの中で、みなさん方にも関わりのある主立った活動をいくつかピックアップしてみると、おおむね次のような内容になり

ます。

組合員活動

- リサイクルの推進……

牛乳パック、アルミ缶、食品トレイ、ペットボトル等の回収と再生

- 買い物袋持参の推進……

マイバッグ運動

- 環境活動の支援……

コープこうべ環境基金、海外植樹支援（モンゴル）

- 環境とのかかわりを学ぶ……

環境学習会等の実施

事業活動

- 廃棄物の削減……

総量の把握と削減、分別、エコファーム事業

- 省エネルギー……

低公害車の導入

- 商品への環境配慮……

容器包装の削減、脱塩素系の容器包装の採用、環境商品の開発

アルミ缶がフライパンに再生 ～リサイクルの推進～

現在、日本で排出されているゴミの多くは、リサイクルすれば資源として活用できるものが多く含まれています。空き瓶、空き缶、古紙な

どは、古くからみなさんが良くご存じの馴染みのある品物ですが、ここ近年はペットボトルや食品トレイといったプラスチック類も多くリサイクルされています。

コープこうべでは、「ものの命を大切に」のキャッチフレーズのもと、ゴミの削減と資源の有効活用を目的に、1990年に牛乳パックのリサイクル活動をスタートしました。その後、回収品目を増やししながら、店舗や協同購入での容器・包装類の回収・リサイクル活動を進めています。現在は、店舗などから排出される食品加工くず等の廃棄物を堆肥として再利用することをはじめており、この取り組みがエコファーム事業と呼ばれるもので後ほど詳しくご紹介したいと思います。

2000年度については、次の通りの回収を行う

ことができました。

2000年度リサイクル品回収実績

牛乳パック……………571トン

アルミ缶……………157トン

スチール缶……………113トン

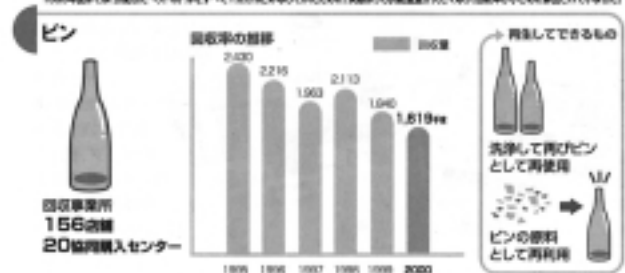
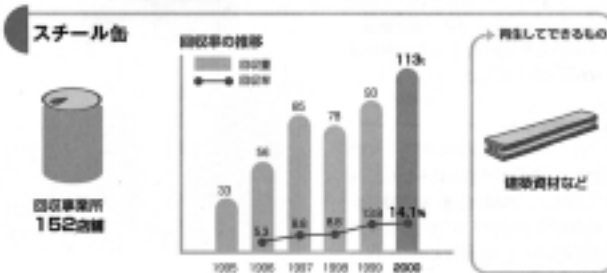
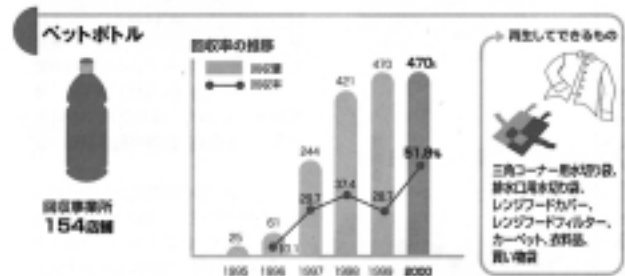
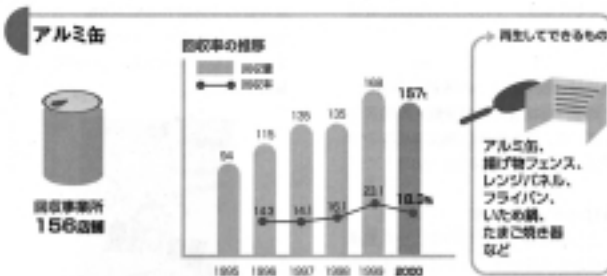
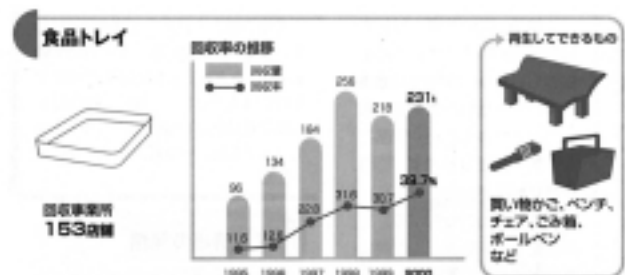
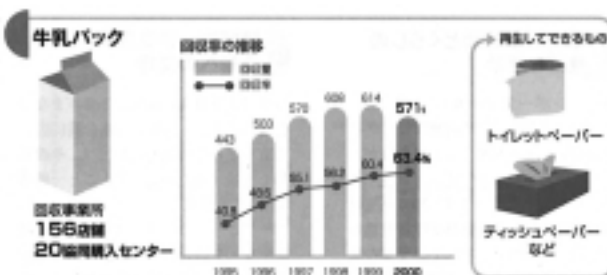
食品トレイ……………231トン

ペットボトル……………470トン

ビン……………1,619千本

このように回収された廃棄物はそれぞれ、牛乳パックはトイレットペーパー等、アルミ缶はフライパン等、スチール缶は建築資材等、食品トレイは買い物かご等、ペットボトルは排水口の水切り袋や衣料品等、ビンは再びビンの原料等に再生されています。

リサイクル推進の一方で、廃棄物そのものの排出量を減らすことも大切です。食品トレイ等



コープこうべが取り組むリサイクルのようす

を廃止して昔ながらの量り売りをすればどうかという意見もありますが、商品の保護や安全性確保の問題等があり実現が難しいところです。

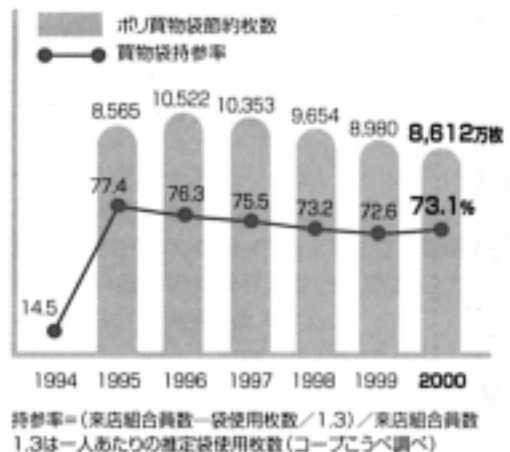
リサイクルの新しい取り組みとしては、協同購入用に配布されている「めーむ」という商品案内チラシの回収を99年度より実験的に開始し、2000年度には285トンの回収を行っています。その他、協同購入では、サルモネラ菌による食中毒対策から中止した卵パックの再利用を組合員の声によって新たにPET製にリサイクルするなど、みなさん方からの声によって取り組みが進められている例もあります。

こうしたリサイクルの推進には、消費者の意識の高まりが重要であり、いかにリサイクルの理念を理解していただき浸透させることができるかが、回収率アップのポイントになっています。しかしながら、まだまだリサイクルの考え方の浸透は十分ではなく、リサイクルBOXをゴミ箱と間違えて、ひどいときにはヤカンや紙おむつが紛れ込んでいることもあります。また、そもそも食べ物や商品を購入する際は、環境への影響やリサイクルの取り組みを第一に考える消費者は少なく、多くの方は味や価格を優先させているのが現実であり、リサイクル活動を進めていく上では悩ましいところです。

原油ドラム缶4,306本分の節約 ～マイバッグ運動の推進～

コープこうべでは資源の節約とゴミの削減のために、1978年からマイバッグ運動を開始しています。当初は袋を持参するとスタンプによる値引きをするという方法でしたが、より多くの方に暮らしの中で省資源に取り組んでいただくため、1995年よりレジでは基本的に袋を渡さないことにし、必要な方には5円で購入していただく方式に変更しました。来店するすべての方が参加できる取り組みとして、またマイバッグを持ち歩くのがどこでも日常的な風景になるように運動を進めています。

買物袋持参率とポリ買物袋節約枚数の推移



マイバッグ運動の成果

また、マイバッグ運動の延長として専用の買い物用カゴを持参するマイカゴ制度も展開しています。当初はマイカゴをペットボトルの再生製品として製造していたのですが、夏場、車の中に置いておくと熱によって変形するというトラブルがあり、その後はポリプロピレン再生カゴに変更して、2000年度までに約23,900個を供給しています。

こうした取り組みの結果、4人に3人の方が袋を持参しており、2000年度には8,612万枚のポリ買い物袋の節約を実現しました。これを原油に換算すると200リットルのドラム缶4,306本分になります。

5円でできる環境活動への参加 ～ポリ買い物袋の有料化～

5円でポリ買い物袋を利用いただくのもマイバッグ運動への参加のひとつになっています。他では無料でもらえる袋に5円を出していただいた気持ちを、環境保全につなげていきたいという思いから、買い物袋代金を地域の環境活動、社会的な環境の取り組みのために、次のように役立てています。

2000年度活用実績

コープこうべ環境基金 ……1,300万円

エコファームでの環境学習 ……207万円
 マイバッグ運動推進 ……3,043万円
 子ども向け環境学習活動強化 ……505万円
 地域緑化、国際貢献(植樹) ……966万円
 地区環境活動支援 ……768万円

また、2000年度には買い物袋代金として約8,300万円が集まり、2001年度に次のような活動を推進していく資金に充てています。

2000年度代金の2001年度使途計画	
コープこうべ環境基金	1,500万円
マイバッグ運動推進	2,440万円
緑化や地域の環境活動 などの支援	1,860万円
学習啓発活動(子どもを 対象にしたものなど)	1,100万円
将来世代のために エコファーム関連費用	1,400万円
計	8,300万円

買い物袋代金の累計の繰越金5,083万円の使途については、2001年度環境委員会で検討していきます。

2001年度の買い物袋代金の活用計画

シベリヤカラマツ23万本の苗の植樹 ～中央アジアへの植林支援活動～

中央アジア諸国の森林再生を目的として、1998年よりコープ・グリーンロード運動と呼ばれる支援活動を開始しています。3年目にあたる2000年度には、兵庫県、神戸製鋼所とも連携し、モンゴル国自然環境省と支援に関する契約に調印を交わしました。コープこうべからは150万円を支援し、このお金をもとにシベリヤカラマツ23万本の苗の植樹、家畜から苗木を守るための柵の設置、育苗実験等が行われています。また、モンゴル国自然環境省の方を招いてコープ・グリーンロード運動支援大会を開催し、運

動の意義の確認を行いました。

こうした活動は買い物袋代金の他に再生紙トイレットペーパーの商品代金の一部を積み立てた「コープ・グリーンロード基金」によって支えられています。

私は、このモンゴルへの植林活動も担当しており、今年はコープこうべの組合員の中から自らの手でモンゴルの地に木を植えたいという方を募り、8月10日から15日にかけてモンゴルを訪問してきました。植樹作業は、15～20cmの苗木に対し50cmほど穴を掘って土をふるいにかけて後に再び土を戻し木を植えるというもので、思った以上に手間がかかり500本は植樹できると思っていたものが結局は220本程しか植えることができず、知らない土地での植樹作業というものの難しさを改めて知った次第です。もっとも植樹事業自体は、モンゴル自然環境省への資金支援を元に、経験豊富で作業に手慣れたモンゴルの方たちの手で着々と進んでいます。

今回のモンゴル訪問では、国連環境計画(UNEP)の親善大使である歌手の加藤登紀子さんが私たちの植林活動の視察に訪れ、今回モンゴルを訪問した方々と一緒に植樹をしていただくことができました。

また、その後ひょうご環境創造協会とモンゴル自然環境省が主催してウランバートル市内で開催された「モンゴル森林再生国際フォーラム」にも、加藤登紀子さんと同じく私たちもパネラーとして参加しました。フォーラムでは、コープこうべが取り組んできた森林再生への植林事業についてこれまでの取り組み状況の報告を行うとともに、今後の課題について日本とモンゴル双方の関係者の間でディスカッションを行うことができました。

資源循環型農業の実現をめざして ～エコファーム事業の取り組み～

それでは、本日の講演のタイトルにもあるエ

コファーム事業の取り組みについて、みなさんにご紹介したいと思います。その前にコープこうべが取り組んでいる「フードプラン」についても少し触れておきたいと思います。

安全・安心とおいしさを追求した食べものづくり ～フードプラン商品について～

フードプランとは環境に配慮した生産方法によって消費者、生産者にとってより一層の安全・安心とおいしさを追求したトータルの食べものづくりへの取り組みで、1988年にスタートし農作物をはじめ卵、肉、魚と多岐にわたっています。

フードプランの基本コンセプト

- 生産あるいは飼育から消費までの全過程において物質・エネルギーの循環をはかり、環境・生態系の保全を十分に考慮します
- 農産物はすべて有機栽培・無農薬栽培・減農薬栽培のいずれか又は複数に該当します
- 自然環境や生態系に配慮した育て方をします
- 日本の農水畜産業を守り育てるためにすべて国産です
- 残留農薬・抗生物質等の検査をして安全性

2000年度フードプラン供給実績表

品目	物量 (t)	前年比 (%)	供給金額 (百万円)	前年比 (%)
野菜・果物	9,944.7	103.1	2,664	98.7
大いけす 育ちぶり	703.6	96.8	1,010	98.1
菜鳥類	8.8	76.7	28	92.1
鶏肉	167.1	104.3	204	101.7
鹿児島 黒毛和牛	15.9	89.6	52	84.2
十勝清水牛	25.9	—	64	—
ひら飼いたまご	247.3	99.5	142	97.9
米	4,208.7	127.9	1,870	105.6
豆(小袋)	24.1	367.2	28	336.3
加工品	—	—	453	105.7
累計	15,346.1	108.8	6,515	102.2

を確認します

このフードプランの考え方をもとに、廃棄物を削減し資源を循環利用していくことを組み合わせたものが、エコファームの取り組みになるわけです。

堆肥づくりと減農薬野菜の栽培からなる環境 共生型農園～エコファーム事業の概要～

エコファームは、店舗から排出される食品加工くず等の廃棄物を堆肥にする「コープ土づくりセンター」と、その堆肥を利用して野菜を生



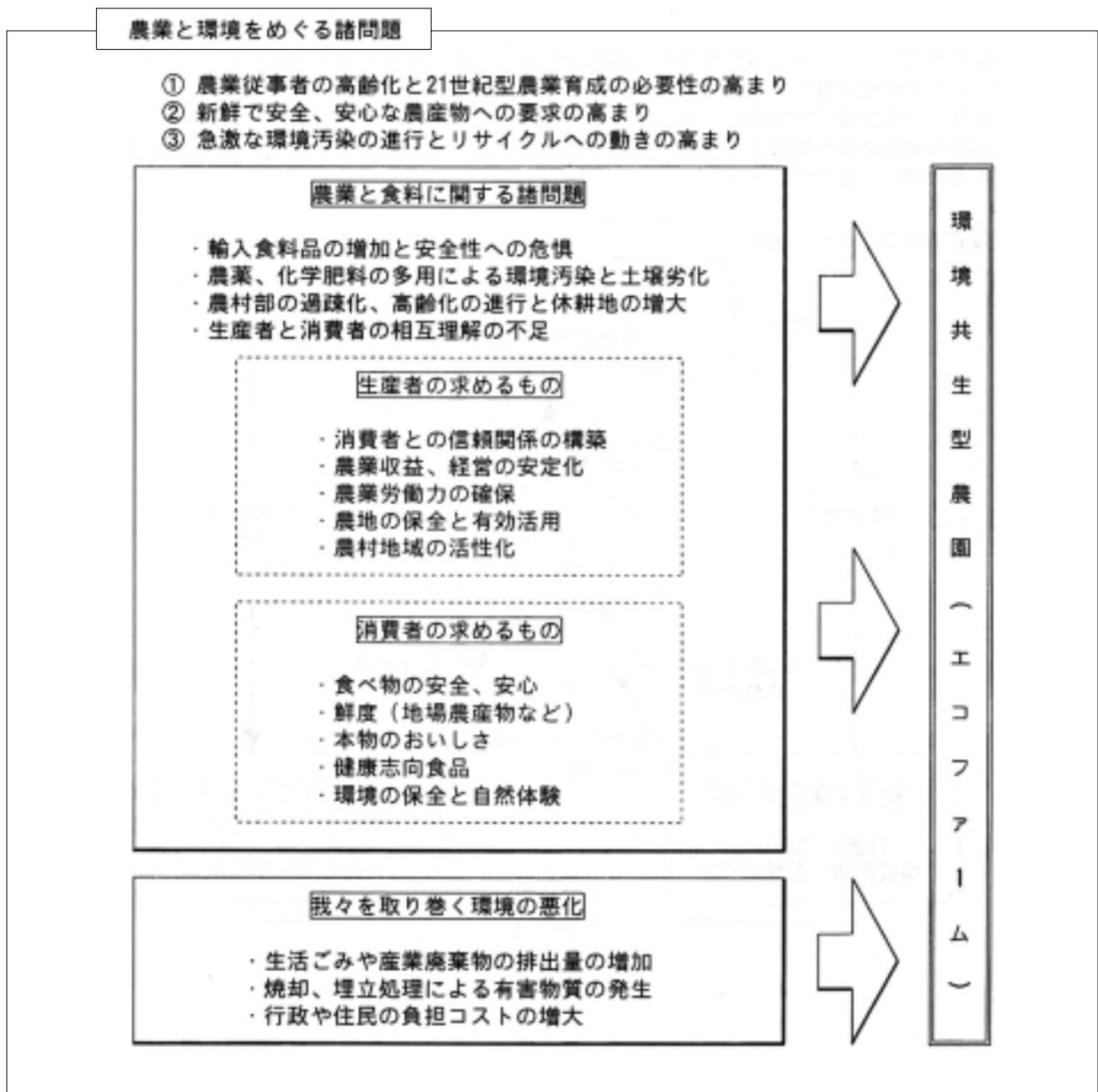
産する「(有)みずほ協同農園」からなる環境共生型農園のことをいい、次の3つの目的を持っています。

エコファーム事業の目的

- 廃棄物の再資源化を実現することによって、事業者としての社会的責任を遂行します
- フードプランのガイドラインに沿った安全・安心な作物を生産し、より直接的な形で食卓へお届けします。

- 農業体験を通して、農業や環境への組合員の理解を深めるとともに、生産者と消費者の交流を推進し、生産者、消費者、生協が一体となった新しい農業を実現します

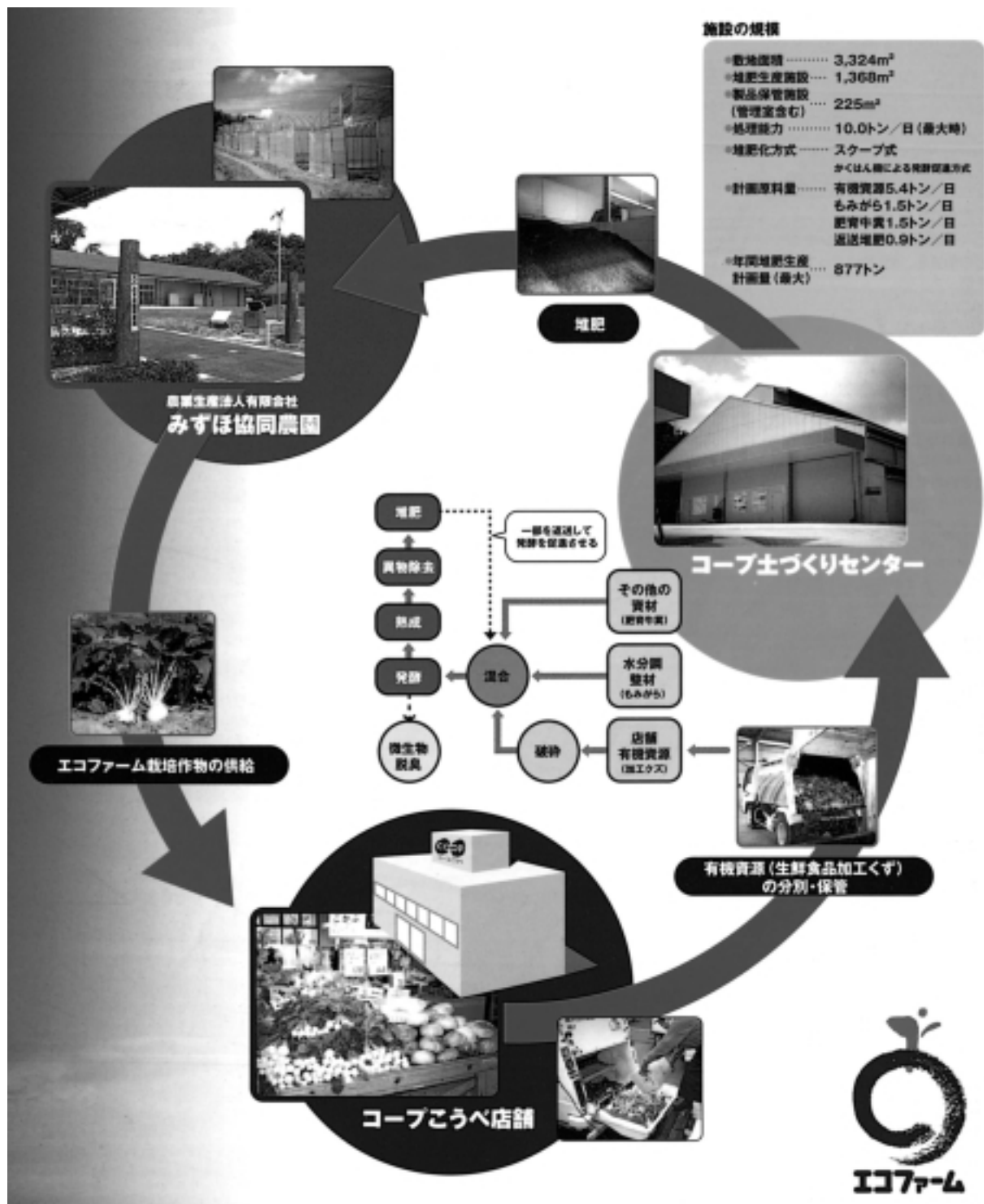
エコファームのある三木市細川町瑞穂大二谷地区には、水田約20ha、果樹園10ha、普通畑20ha、牧草地3haの農用地があります。水田では酒米である「山田錦」の栽培が中心となり、普通畑では大豆と小麦の複合経営を目指していましたが、兼業農家がほとんどであり労働力不足



と価格の低迷から作付けが困難な状況に陥っていました。そのため平成8年から地元農家の方とコープこうべの間に話し合いが行われ、この20haの畑地の有効活用と堆肥生産施設を核

とした環境共生型農業の実現を目指して取り組むことになったものです。

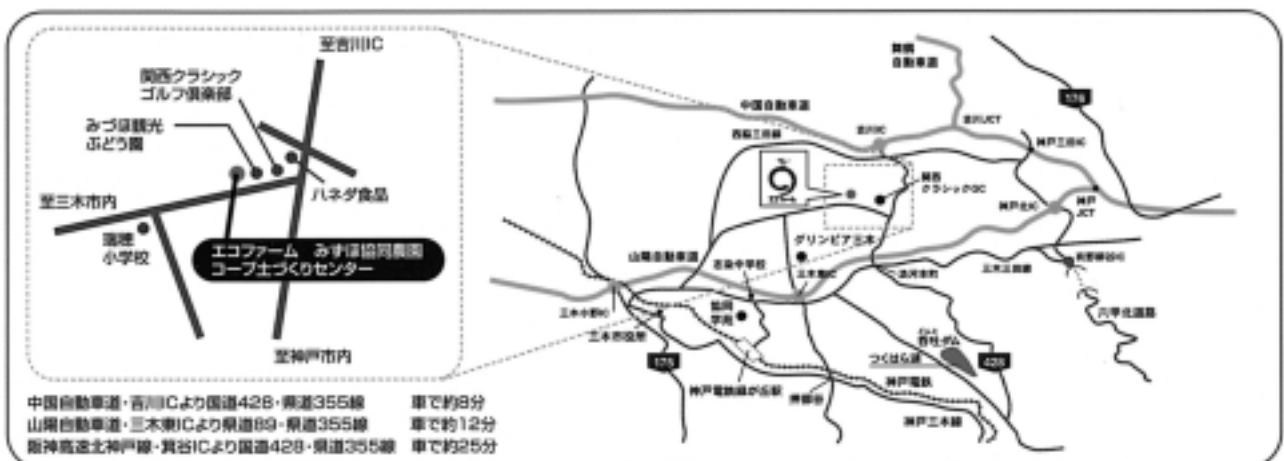
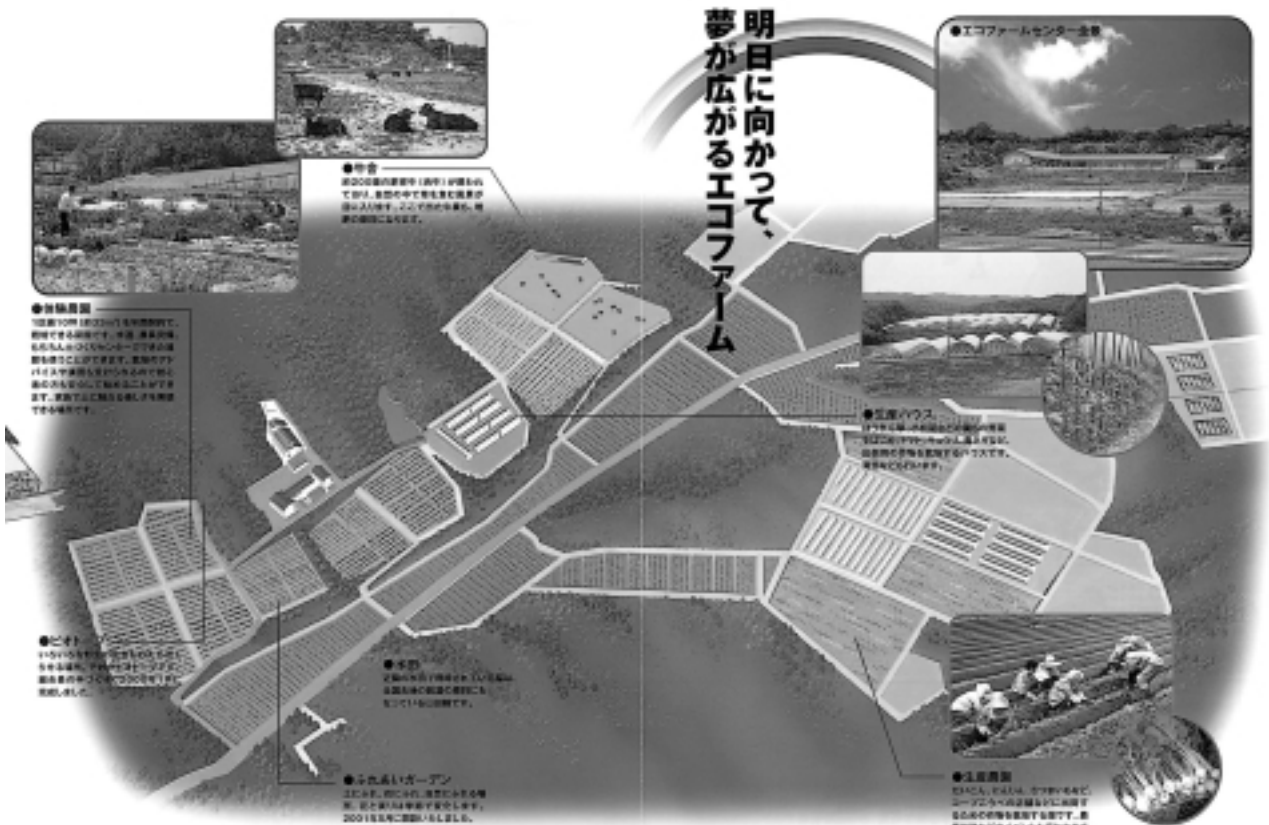
このような経過のもとで、平成10年1月に(有)みずほ協同農園が設立され、平成9年度地域リ



エコファーム事業のめざす資源循環型農業

サイクルシステム確立事業からの助成金を受け平成10年10月には堆肥生産施設「コープ土づくりセンター」が完成し、平成10年度消費者連携農業生産育成事業の補助金を受け平成11年3月

には「エコファームセンター（集出荷施設、交流施設、農機具格納庫）」が完成しました。現在、(有)みずほ協同農園は地元農家の方から13haの農地を借りて生産を行っています。



兵庫県三木市細川町瑞穂2328-1 TEL/0794-88-3366 FAX/0794-88-3368

専用の有機資源収集車で回収

～廃棄物の分別と回収～

エコファームの取り組みの第一歩として、まずは廃棄物の回収について考える必要がありました。店舗の生ゴミと一口にいっても、野菜の外葉や魚のあらといった店舗に並ぶ前に発生するゴミと、商品の売れ残り等その内容はさまざまなものがあり、堆肥づくりにはどのようなゴミが適しているのか最初は手探りの状態ではじめました。

まずは、それぞれのゴミがいったいどれくらい出るのかということを知る必要があり、店舗から出るゴミが混ざる前に分別して回収しそれぞれの量を計測していきました。この結果、それぞれのゴミの総排出量を把握することができ、これが後工程である堆肥づくりの段階での貴重なデータとなっています。

神戸市および三木市内の中・大型店33店舗から出る廃棄物を、有機資源収集車（専用のパッカー車）2台で回収し、土づくりセンターに搬入しています。また、地元肥育農家の牛糞と、三田、三木市内のライスセンターのもみがらを搬入し、副資材として投入しています。現在は、コープこうべ全店舗の有機廃棄物の約20%にあたる約900トンの生ゴミが、土づくりセンターで堆肥化されています。

有機資源収集車

各店舗から出た有機資源（野菜・肉・魚の加工くず）を効率よく回収し、土づくりセンターへ運搬するために改良された専用車です。

大容量汚水タンクで運搬中も 計量センサーで各店舗、部門ごとの汚水漏れを防ぎます。 排出量を集計できます。



サブホッパーで安全で もちろんアイドリングストップに 確実な収集を行います。 つとめています。

食品廃棄物からの堆肥づくり

～コープ土づくりセンター～

店舗からでたゴミを分別回収し、堆肥を作るのがコープ土づくりセンターです。

搬入された廃棄物は、まず破砕機で粉砕され、牛糞、もみがら、戻し堆肥と一緒にベルトコンベアで発酵槽内に投入されます。堆肥原料は発酵槽内で約13日間、養生槽内で約45日間を費やして発酵し、粒度選別機でビニール等の不純物を取り除き製品堆肥となります。店舗での分別回収が完全でないため、異物の混入もあり段ボール箱を止めている大型のホッチキスや、魚のあらなどに含まれている釣り針。商品の包装フィルムなどが見つかります。そのうち金属は磁石で除かれています。

発酵槽は長さ35m、幅2m×2槽、深さ2mで、栄養分が多いため原料投入後2～3日後には原料の温度が70℃以上にまで上昇します。また、原料の分解に伴って汚水が発生しますが、この施設では一旦汚水槽に貯留し、発酵槽の後半部分で原料に散布することで汚水の全量を施設内処理しています。

発酵槽全体と養生槽には防臭フードがかけられ、外部への臭気の流出を防止しています。アンモニア等、発酵途中で発生する臭気物質は微生物脱臭槽で処理後、放出されます。

店舗からの廃棄物5.4トン/日、牛糞1.5トン/日、もみがら1.5トン/日、戻し堆肥0.9トン/日から、870トン/年の堆肥を生産する計画でしたが、現時点では店舗からの廃棄物の全量を集めておらず、もみがらが計画よりも少ないため2000年度の堆肥生産量は621トン/年でした。

生産した堆肥は、当面、ほぼ全量を隣接する(有)みずほ協同農園へ供給し、13haの野菜の作付けに使用しています。また、一部は(有)みずほ協同農園の募集した312区画の体験農園（1区画は約10坪）でも使用され、地元を中心とした一般農家にも供給しています。

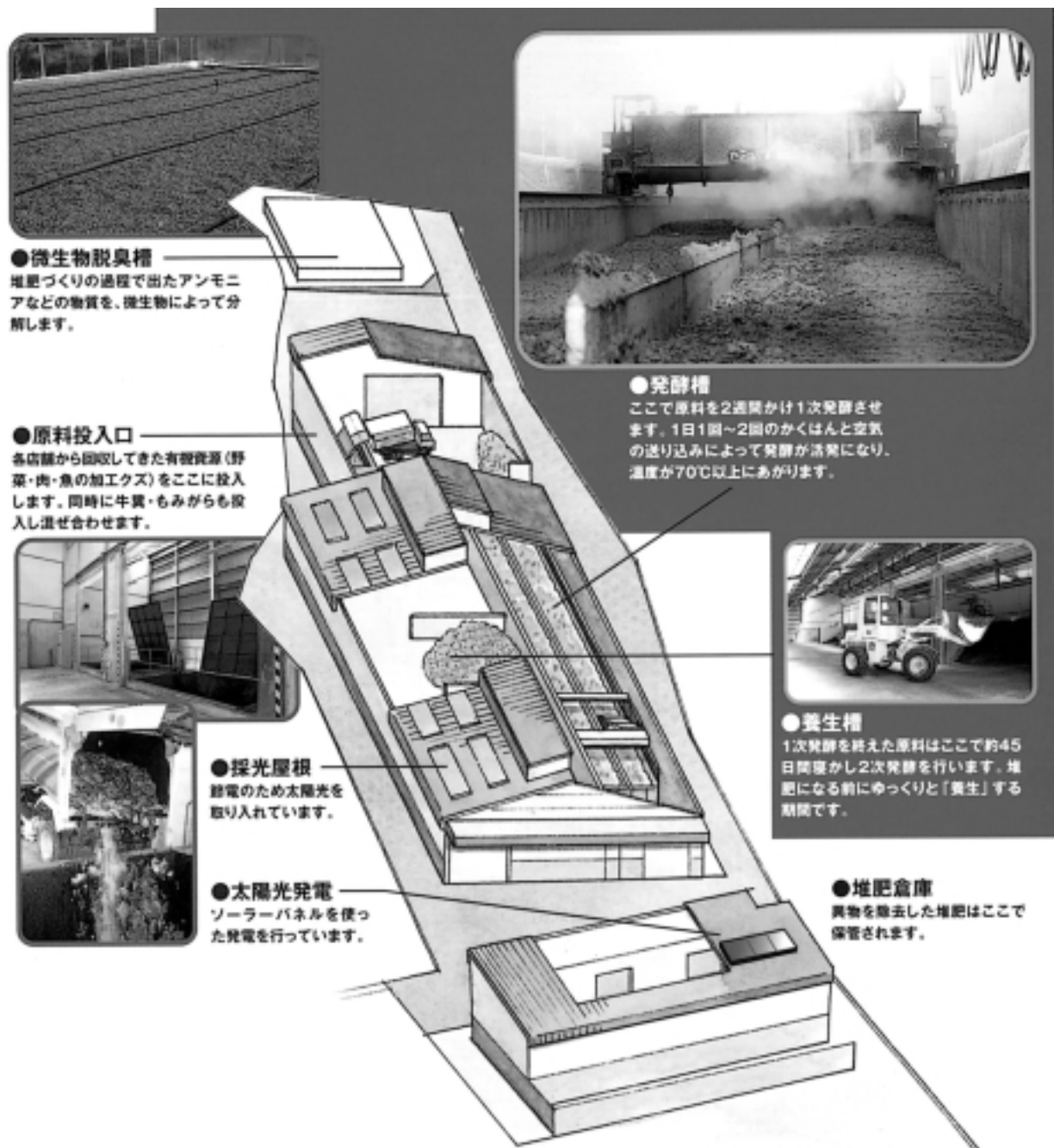
堆肥を使用した減農薬野菜づくり

～(有)みずほ協同農園～

地元農家26名の方が出資して設立された会社であり、環境との共生を目指す農業を実践するために、エコファームでの耕作、作物生産、収穫、出荷までを行っています。コープ土づくりセンターの堆肥を使用して減農薬での野菜栽培

を行っており、さつまいも、トマト、キャベツ、青ネギ、大根など30品目の野菜を生産し、2000年度の出荷総額は約3,100万円となりました。野菜の供給はコープこうべの9店舗への定期的な供給のほか、組合員まつりや協同購入などでの供給を行っています。

堆肥と野菜作りの関係を少し説明しますと、



コープ土づくりセンターの概要

一般的に用いられている化学肥料はチッソ、リン、カリが成分となっていますが、堆肥ではチッソ、リン、カリ以外にもさまざまな成分がバランス良く含まれています。また、堆肥で作った農地にはミミズが活発に動き回るので土が自然に耕される状態になります。この結果、堆肥を何年も使うと水や空気を多く含んでいる野菜作りに適した軟らかい土ができあがりますが、一方で化学肥料だけを使い続ける畑の土はどうしても硬くなってしまいます。現在、多くの農家は効率良く収入を上げるためにも各産地ともに野菜のブランド化を進め、単一種類の野菜作りが主流となっています。しかしながら同じ種類の野菜を栽培し続けることによって病気が発生しやすくなるため農薬を使う必要が多くなり、その結果土が弱くなるので化学肥料を多用してしまうというように、化学肥料と農薬を使用する悪循環に陥っているのです。

化学肥料や農薬を使って作った野菜と、堆肥を使い減農薬で作った野菜の違いを調べたことがあります。面白いことに科学的には味に差はないということでした。それでも堆肥と減農薬で作った野菜の方が美味しく感じるの親の欲目なののでしょうか。しかし農薬の残留度などを考えると、安全で安心できる食べ物づくりに

は、手間はかかりますが堆肥を使用した減農薬野菜づくりが必要であると思います。

商品として売場に並べるためには、味や安全面だけではなく形や見た目も重要になっています。堆肥を多く使用すると、残念ながら大根などの根菜類は二股や三股というように股分かれて商品にならないものが増えるため、根菜類では使用量をひかえる必要がありますが、キャベツなどの葉菜類には向いていると言えます。また、商品を購入する上では価格という面も重要なファクターであり、いくら安心で良いものでも高すぎたは消費者に受け入れられず、せいぜい2割高から3割高が限度と思われるので、この点を考慮することが必要になっています。

みずほ協同農園で栽培されている野菜では、①さつまいも、②トマト、③キャベツが私のお勧めです。さつまいもは土が痩せているほど美味しいものができるといわれているので、比較的どこでも美味しくできますが、トマトは今流行の完熟であり、キャベツは減農薬の良さが出しています。キャベツは虫が付きやすいため通常は農薬を収穫までに8～9回まくのですが、みずほ協同農園では最低限の2～3回しかまくことはなくキャベツそのものが持つ野菜のうまみを実感できると思います。

2000年度の生産状況

	品 名	出 荷 金 額	栽培方法	備 考
出 荷 高	1 サツマイモ	4, 6 9 4	露地栽培	7月の少雨で前年比60%の出来
	2 トマト	3, 8 0 4	ハウス栽培	標準並みの収穫率になった
	3 キャベツ	3, 0 0 4	露地栽培	虫害が減少した
	4 青ネギ	2, 8 3 0	ハウス栽培	
	5 ダイコン	1, 8 6 7	露地栽培	フードプラン作物として供給
	6 コマツナ	1, 6 5 1	ハウス栽培	
	7 ホウレンソウ	1, 1 7 3	ハウス栽培	
	8 カボチャ	9 9 4	露地栽培	作柄良好
	9 コカブ	9 0 6	露地栽培	
	10 ニンジン	8 8 7	露地栽培	
	11 キュウリ	8 2 5	ハウス栽培	
	その他19品目	8, 8 6 8		
	合 計	3 1, 5 0 3		

キャベツは虫が付きやすいと言いましたが、ある年はキャベツの隣にカブを栽培したのですが、キャベツに虫が集まったおかげでカブは大豊作で大変美味しいものができたこともあります。また、害虫の駆除についても農薬を使うのではなく、ガの雌のフェロモンを用いて雄を捕獲するという実験も行っており、無農薬栽培の実現に向けた取り組みも行っています。

また、害は虫だけではありません。イノシシとシカはエコファームにはいませんが、カラスやタヌキによってスイカに被害が出たこともあり、美味しいものは人間だけではなく虫も動物もちゃんと知っているのでしょう。

美味しいと言えば、もぎたてのトウモロコシに優るものはありません。よく昔から「トウモロコシは湯を湧かしてから収穫せよ」と言われるくらいで、1日でその甘みは半減すると言われています。流通過程を考えると、収穫してからみなさんの手に入るまでにすでに何日か経過

しているはずなので、トウモロコシはお店で買ったその日に食べてもらいたいと思います。

敷地内には年間契約で家庭菜園として使える体験農園や、芋掘りを中心に収穫体験などが実施されています。またエコファーム講座として、野菜作りの実践的な技術の習得を行ったり、エコファームで収穫した野菜と周辺の特産物を材料にした料理教室など、2000年度は延べ24回、236名の受講がありました。その他、2000年度に151団体、延べ3,433名の方がエコファームの見学に訪れ、最近では各自治体、行政関係者や業者関係者の見学も目立ってきました。

エコファームの目指す姿について

エコファームは「限りある資源の循環」を実践するためのひとつのモデルであり、私たちが将来にわたって人間らしい暮らしを維持し、地

1. 環境や食糧に関する知識を学び、実践できる人を育てる学校としての役割を果たします。

エコファームは、地域や学校と連携し、私たち一人ひとりが環境や食糧問題に関する知識を身につけてその重要性を理解し、くらしや食生活のあり方を見直すことができるような学びの場を目指します。

2. 食品リサイクル時代の先駆的モデルとしての研究活動と、情報発信をすすめます。

エコファームは、すべての資源が再利用される「廃棄物ゼロ」社会の実現に向け、資源循環のしくみのさらなる拡大を目指します。

3. 安全・安心な作物生産にこだわりながら、経済的に自立できる農業を目指します。

エコファームは、安全・安心と環境保全にこだわりながら、より多くの組合員にご利用いただける新しい供給方法や、魅力ある商品の開発などを通して、経済的な自立を目指します。

4. 農業を志す人を積極的に支援し、後継者の育成を通して農業振興に貢献します。

エコファームは、就農希望者が基本的な知識や技術の習得がはかれるように体制づくりをすすめ、その育成をはかることによって農業振興への貢献を目指します。

5. 多くの人が来園し、体験や交流を楽しむことができる魅力あるれる場にします。

エコファームは、独自の商品の開発や近隣の観光施設とのネットワークづくりをすすめながら、栽培・収穫・調理・加工など農業に関連する様々な体験ができる場所として、子どもから高齢者まであらゆる人が四季を通して楽しみ、くつろぐことができる憩いの場を目指します。

6. エコファームを支える様々な人の思いや力を結集し、ともに活動をすすめます。

エコファームは人とひととのつながりを大切にし、ともに活動できる組合員や近隣農家、伝統技術を持つ人などさまざまな分野の人々と協力しながら、地域活性化への貢献を目指します。

(2001年5月)

球環境の保全をはかるために投じたひとつの小石のようなものです。この波紋が広がり、いつかは社会のシステムそのものが環境保全を目指したものに変わっていくように願っています。

また、現在は「旬みずほ協同農園」での減農薬野菜の栽培については何とか採算ベースとなっているものの、「コープ土づくりセンター」における堆肥づくりは費用面での支援が必要であり、2001年度では5円の有料ポリ買い物袋で集まった約8,300万円のうち、約1,400万円をエコファーム事業の関連として支援している状態です。安全で安心できる食べもののづくりへのこだわりと、経済的な自立が今後の課題となっています。

おわりに

消費者団体という立場では、それほど大きなことはできませんが、コープこうべの環境問題への取り組みが組合員一人ひとりのくらしの見直し活動につながるよう、小さなことからこつこつと進めていきたいと思っています。

本日お集まりのみなさんも、ぜひ一人の消費

者として環境に配慮したくらしのあり方についてお考えいただければと思います。みなさん一人ひとりがひとつでも環境に良いことを実践すれば、少しずつでも生活環境は改善されるはずであり、地球環境は良くなっていくものと確信しています。今の自分に何ができるのかということを考え、小さなことでもくらしの中で取り組んでいただきたいと思います。本日はありがとうございました。

以上

(文責：大野公一)

みやじ たけし 宮地 毅プロフィール

経歴：

- 1983年 3月 神戸大学農学部園芸農学科卒業
- 1983年 4月 生活協同組合コープこうべ
(当時は灘神戸生協) 入所
コープ立花店農産部門勤務
- 1986年 4月 コープ桜塚店農産部門勤務
- 1987年 4月 人材開発部教育チーム勤務
- 1995年 7月 資源循環タスクフォース勤務
(堆肥センター設立準備)
- 1998年11月 コープ土づくりセンター勤務
- 2000年 4月 福祉・環境活動部環境チーム勤務、
現在に至る



栽培実験1年目に収穫された大根を手にされる宮地課長



収穫された野菜「きゅうり」も「かぼちゃ」也大豊作



出荷の準備をする「みずほ協同農園」のみなさん

エコファームで収穫された野菜の販売
「さつまいも」「きゅうり」「青ねぎ」
「こかぶ」など、盛りだくさん



エコファーム講座「初めての菜園作り講座」の受講風景



収穫体験「いも堀り」は子どもたちに大人気